正義のヒーローナンバーセブン

無想転生

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

学園都市の闇の中で生きる少年、削板軍覇は正義のヒーローに憧れていた。

だから彼は持ち前の根性で己を鍛え上げた。

そして気がつくと、彼は〝すごいパンチ〟を撃てるようになっていた。

同時に世界最大の原石として無敵の力を手に入れた彼は、余るほどに溢れていた根性を殆ど失ってしまっていた。

これは、そんな根性を失ったヒーローが悪と戦う物語である。

目次

ヒーロー ―――――― 1
ビリビリ中学生 ―――――― 9
憧れ ―――――― 16
ヒーロー、捕まる ―――――― 20
番外編
《番外編》メリーコワシマス（上） 31
《番外編》メリーコワシマス（下） 55

ヒーロー

学園都市にあるごく普通のアパート。
そこに彼は住んでいた。
現在は朝の六時である。
部屋の中ではベランダの窓から入り込む朝日をめいいっぱい浴びながら、朝食の卵かけご飯を食べる彼の姿が見える。
テレビから映し出されているニュース番組では、ついこの間起きたセブンスミストの爆発事件についてが報道されている。
因みに犯人は無事捕まったようだ。
「ニュースを見たところ、大した事件もなさそうだなー…今日もパトロールから始めるか」
そんなことを呟きながら、彼はリモコンでテレビの電源を消し、すでに食べ終わった朝食の皿を流しに置いて、そのまま洗面所に移動して歯磨きをした。
口の中がスッキリとした彼は再びリビングに戻り、服を着替える。
頭にタスキを巻いて、お気に入りのシャツの上に白い学ランを羽織る、これが彼の正

装だ。
「よし、いくか」

ヒーローとしての彼の日課が始まる。

彼がパトロールを始めて五時間が経った頃、ある廃屋の付近で事件が起きていた。
一人の少女と男子生徒が不良に襲われていたのだ。
男子生徒の方は殴る蹴るの暴行の嵐を受けたのか、全身ボロボロのまま地面に倒れて気を失っている。
少女の方は膝や肘に擦り傷があるも、まだまだ無事そうだ。
しかしそれも時間の問題である。
ニタニタと笑いながら三人の男が少女に迫り寄っている、少女は恐怖で足がすくんで動けないのか、顔を引きつらせてその場に立ち尽くすだけだ。
「ま、恨むんなら自分を恨むんだな」

「そうだぜ、何もできないくせに、正義の味方気取って割り込んできた奴が悪い」

この少女は本来、この件とは何の関係もなかった。

しかし偶然、今現在気を失っている男子生徒がこの男達に殴られているのを目撃したのだ。

正直怖かった、見なかったことにしてその場をこっそり通り過ぎようとも考えた、しかしどうしてもほっとけず、勇気を出して男達を仲裁しようとした。

当然、男達は聞き入れはしなかった。

それどころか暴力のターゲットに自分も加えられてしまったのだ。

だが悪い事ばかりではない、この街の治安維持組織の一つである風紀委員（ジャッジメント）の友人が助けに来てくれたからだ。

しかしその友人も、男達のリーダーと思われる男と戦っているため、今はこの場にいない。

結構苦戦していた、すぐには来られないだろう。少なくとも…この少女がこの男達の毒牙に晒されるまでは。

「ぎゃはははは！ほんと馬鹿だよなこのガキ！ヒーローなんてこの世にいねぇんだよ！そんなこともわからねぇのか!!?」

男の一人の下品な笑い声が聞こえてきた。

「ガキだからわかんねぇんだろ、まだ頭ん中が花畑なのさ」
「そっか、そっか。なら俺達がちゃんとわからせてやらないとな！
俺達みたいなものを怒らせると、どうなるかってのをよぉ‼？」
男達は更に少女に迫り寄った。
もう既に手を伸ばせば届きそうな距離にいるが、それでも何もしないのは、この少女をもっと怖がらせるためだろう。
少女は悔しかった。
自分が勇気を振り絞って行った行動を笑われたのもそうだが、何より目の前の男達が…こんな最低の男達が笑っていることが、悪事を働いて尚笑続けていることがこの上なく悔しかった。
同時に、少女は自分の無力さを恨んだ。
もし…もし自分に能力があればどうなっただろうか？
もし自分に強力な能力があれば、目の前で行われているこんな悪事、自分の力で止めることができるのに…
今まで能力に憧れを抱いたことは数え切れない程あったが、今ほど能力を欲したことは無いだろう。
だが彼女は無能力者だ。

たった今、突然能力に目覚めるなど、そんな都合のいいことは起きはしない。
彼女にはもう、祈るしかなかった。
存在するはずもないヒーローの存在を。
（もし…この世にいるんなら…）
恐怖の中…目の前に伸びる手が、自分に触れようとする時、彼女は心の底から叫んだ。
「助けて…！ヒーロー!!?」

瞬間、少女の姿が消えた。

男達は目を見開いて少女の行方を追った。
ギョロギョロと慌てて動くその眼球は、少女のいた場所から、右に十数メートル程離れた位置を見て止まった。
そこには一人の男が立っていた。
男の両腕にはさっきの少女が抱えられている。

少女は戸惑っていた。無理もない、ついさっきまで男達に襲われる寸前だった自分が、次の瞬間には抱えられているのだから、それもお姫様抱っこの様な状態で。

頭の中は混乱しているが、この…今自分を抱えている人が、自分を助けてくれたのはなんとなく分かった。
鍛えられた逞しい腕…袖を通さずに羽織っている白い学ランが、マントの様にヒラヒラとはためいている。
恰好は全く違うのだが…少女は目の前のその姿を見て、漫画や映画に出てくるあのスーパーマンを連想した。
少女は優しく地面に降ろされた。
そのまま白い学ランの男は移動し、男達の前に立ち塞がった。
「テメェは誰だ⁉?」
男の一人が叫んだ。
白い学ランの男はまっすぐと視線を男達に向けながら、気の抜けるような声でこう言った。
「趣味でヒーローをやっている者だ」
その声と、何処と無くやる気が無さそうに見える顔で、男達の怒りは爆発した。
「趣味でヒーローをやってるだと⁉?ふざけてんじゃねぇぞ‼?」
「いや、結構本気なんだけど…」
「その顔で何が本気だぁ⁉?」

男達は青筋を浮かべながら白い学ランの男を睨みつけた。
「ほんと今日はむかつくぜ、ヒーロー気取りの馬鹿が二人も絡んでくるんだからよぉ‼?」
「だったら俺達が教えてやるぜ‼?‥夢見がちな馬鹿に、現実ってやつを‼?‥」
三人の男達はそれぞれ、発火能力、風力操作、念動力を用いてヒーローを名乗る男に襲いかかった。
対するヒーローを名乗る男は、ゆっくりと、ただ拳を硬く握った。
「泣いて謝って！後悔しやがーー」
「ほんのりすごいパンチ」
「ビブルチッ！」
ほんの一瞬の出来事だった。
三人の男達はヒーローを名乗る男の拳から放たれた謎の衝撃波によって、情けない悲鳴をあげながらメートル単位で吹っ飛ばされた。
ヒーローは突き出した拳と気絶した男達を眺め、突然その場で項垂れた。
「また…ワンパンで終わっちまった」
「へ‼?‥へ⁉?‥」
少女は呆然と、目の前の光景を眺めていた。

何が起こったのかもわからない、気がつけばあの男達は白目を向いて倒れていたのだ。
（いや、あんまり期待はしてなかったけど、でも三人まとめてワンパンで倒されるってのはどうだよ）
ヒーローは未だに項垂れたままである、その上何かをブツブツと呟いている。

「・・・・・」
頭の中はまだ少し混乱しているが、少女の心は強く高揚していた。
自然と笑みが零れた。目から涙が頬に伝わってきた。
泣きながら笑う少女はゆっくりと呟いた。
「……本当にいたんだ、ヒーローって…」
まるで暗闇の中から、暖かな陽光の中へと救い出されたような気分だった。

ビリビリ中学生

ヒーロー、削板軍覇は大事な決戦の為に備えていた。
削板はキリリと引き締まった表情で、今日を示す欄に〇印の入ったカレンダーを眺めている。
その顔はまるで、戦前の武人のようだ。
そこまで真剣になってでも戦わなくてはならない理由が、削板にはあった。
理由はごく単純…金が無い。
そう、彼は万年金欠なのだ。
それも毎月の食費に困るほど、シャレにならないくらい金が無いのだ。
だから彼は戦わなくてはならない。
例え他者が得るはずだったものを独占しようとも、卑怯な手を使おうとも、彼は勝ち取らなくてはならないのだ。
彼は覚悟を決めて玄関のドアを開いた。
今から行くのは戦場だ…そう、〝スーパー〟という名の戦場に
何故なら今日は、〝特売日〟だからだ。

ーーーーーーーーーー

「ちょっと…早過ぎたかな…」

スーパーに向かう途中、削板は公園にある時計の前で立ち止まっていた。

そう、彼の言う通り家から出るのが早すぎたのだ。

張り切って早く出てても、まだ店が開いていないのなら意味がない。

なので削板は、公園のベンチで自分が買う商品を改めて品定めすることにした。

（今日は〝お肉安売りデイ〟の日だ。

最近はろくに肉なんか食ってないからな、今日は絶対に手に入れなくちゃ。

しかし献立はどうするかな…普通に生姜焼きなんかでもいいが、折角の機会だしもうちょっと豪華にいきたいしな…）

手持ちの金額で予算を決め…できるだけ安く食材を入手し…なおかつバランスのいい献立を考える、その姿はさながら、主婦である。

（よし、決めたぞ。今日はすき焼きにしよう！

この前タイムセールで買い過ぎた豆腐と白滝も残っているしな。

もやしも栽培してるから、文字通り腐る程ある）

などと考えている中、突然誰かの叫び声が聞こえてきた。

「不幸だぁぁぁ!!?」

見ると、二人の学生が公園の中で騒いでいた。

一人は女子中学生…その制服から、この学園都市でも五本の指に入る名門校であり、世界有数のお嬢様学校である常盤台の生徒だということがうかがえる。

もう一人は男子高生、ウニのようなツンツン頭以外はこれといって特徴の無いごく普通の少年だ。

しかし不思議な事に、能力者である常盤台の少女が放った電撃…それも常盤台に在学という時点で最低でもＬｅｖｅｌ３以上のものを、あろうことかその男子高生は右腕一本で受け止めていた。

いや、受け止めているというより、電撃がその右腕に触れた瞬間、跡形も無く消滅している…と言った方が正しいだろう。

「私の電撃をこうも容易く防ぐなんて、相変わらずわけわかんない右腕よね…！」

「わけわかんないのはお前だろ！

毎度毎度出会い頭に電撃飛ばしやがって！」

右腕を構えながら常盤台の電撃少女から逃げ回る男子高生、その表情は一方的な追いかけっこに本気で迷惑している顔だ。

「こっちは生活に関わる重要な用事があるだよ。
だから今日は相手してやれないんだビリビリ」
「ビリビリいうなーっ‼?」
ピシャッと、辺りに閃光が走った。
「・・・・・」
削板はこの二人を知っていた。何度も会ったことがあるからだ。
そして関わるのはどのくらいめんどくさいかも知っていた。
正直そのままスルーしたいが、辺り構わず放電しまくっている女をそのままにしておくわけにもいかないし、何より眩しい電光や騒ぎ声がうっとおしい。
仕方ないので、削板は注意することにした。
「おい、これ以上放電するのはやめろ。
近所迷惑だぞ」
やる気の無さそうな顔で二人の前に進み出る削板。
「あ!あんたは…!たまに上条さんをビリビリ中学生から救ってくれる…!ヒーロー‼?」
「だからビリビリ言うなっての‼?」
「助かった!」と、救いの手に感激の表情をする上条と名乗る少年と…

「ビリビリ」という単語に反応するビリビリ中学生。
「でもちょうどいいわ、あんたも私の標的の一人よ！
勝負しなさい！」
「嫌だ」
即答だ。
「勝負なんかしねぇよ。俺はただ注意しに来ただけだ。
…たく、所構わず放電しやがって…この前お前らが俺の家の近くで暴れてたせいでな！家が停電しちまったんだぞ！」
削板は思い出していた。この…目の前にいるビリビリ中学生の電撃のせいで、駄目になったコンビニ弁当を。
「私を止めたいんならいい方法があるわ」
「いい方法って？」
「私と勝負して、勝てばいいのよ！」
（あぁー…めんどくせえこいつ）
何が何でも削板と勝負しようとするビリビリに、削板は心の底からそう思った。
これだからあまり関わりたくないのだ、こうやって勝負を挑んでくるのはいつものことである。それがたまらなくめんどくさいのだ。

「…一応聞くけど、何でそんなに勝負したいわけ？」
「私は学園都市にも七人しかいない超能力者（Ｌｅｖｅｌ５）の第三位、超電磁砲（レールガン）の御坂美琴よ？
その私の電撃を受けて無事な奴なんて、あんたとこいつくらいしかいないもん」
ビリビリこと御坂が削板と上条を指さして言った。
「そんな理由で付け狙われる、上条さん達の気持ちも考えてはくれませんかねぇ…」
上条がハッキリと聞こえるくらいの声量で愚痴り気味に言ったが、御坂は聞こえなかったかのように振舞った。
「というわけで、勝負しなさい！」
「というわけって、どういうわけ？」
「あんたに拒否権は無いわ」
問答無用とばかりに、体からバチバチと電気を発生させる御坂。完全に臨戦態勢だ。
「何でそうなんの？」
「この出力でもあんたなら死にはしないでしょ？
電極刺したカエルみたいに、ビクビク痙攣させてあげるわっ‼？」
激しい雷光と共に、御坂の放つ強烈な電撃が削板に襲いかかった。
この威力は常人なら確実にアウトだ。
しかし…

「服焦げるだろ」

一撃。

襲いかかる電撃よりも素早く移動した削板は、一瞬にして御坂の背後に回り、後頭部にチョップを食らわせた。

まるで虫をはたき落とすかのようなチョップ…しかし見た目よりも遥かに威力の高いそのチョップは、御坂の体を地面に叩きつけ、一瞬で意識を吹き飛ばした。

「あんまり迷惑かけるなよな」

と言っても、既に御坂の耳には届いていないだろう。

気を失ったまま、電極刺したカエルのように、手足をピクピクとさせて地面に這いつくばっていた。

「あー…ははは…」

これにはもう笑うしかない。

完全に御坂が悪いのだが、上条はこの呆気なさ過ぎる光景を見て、何故か御坂が無性に可哀想に見えてきた。

憧れ

「かっこいい！」

小さな少年が一人、食い入る様にテレビを見ていた。

少年を夢中にさせているのは、ヒーローものの特撮番組である。

内容は悪の限りを尽くす怪人に、勇気ある正義の味方が果敢に挑むという、何処にでもありふれた子ども向けのものだった。

「強いなー…凄いなー…かっこいいなー…

俺もいつか、ジャスティスマンみたいになりたい」

しかしそんな、何処にでもありふれた子ども向けのヒーローだからこそ…正義感の高い勇気のある絵に描いたようなヒーロー…そんなヒーローだからこそ、この純粋な少年は心から憧れたのだろう。

ーーーーーーーーー

「削板さん？」

上条の呼びかけにより、削板は我に返った。
「え…!?あ…悪い、ぼーっとしてた。
でもなんでさん付けなんだ？」
「いや…一応上条さんの恩人なもので」
と、上条が削板の背で眠っている御坂を見ながら言った。
「さんはいらねぇよ、同い年だろ？」
「…うーん…まぁそうだよな…じゃあ次からは削板って呼ぶよ、よろしくな」
上条が笑ながら手を差し出したので、削板は応えるようにその手を握った。
何度か出会ったことがあるのだが、こうして面と向かって会話をしたことは一度もなかった。
と、削板は今更ながら思った。
「…と、話してる場合じゃねぇよな」
「あぁ、俺達はこれから、激しい戦いを繰り広げなくちゃいけないからな」
削板と上条がお互いの顔を見ながら笑いあった。
その顔は実に爽やかであったが、同時に、確かな緊張感に満ちていた。
そう、ここは戦場だ、今はお互いが敵どうしである。
もちろん、お互い協力し合い、戦友とも呼べる関係でいたいとは思ってはいる…そ

う思うのだが、所詮は他人、相手のことは二の次だ。
残酷かもしれないが、誰だって自分が一番可愛いのだ、これも仕方ないことなのだろう。
だから双方…、相手にしてやれることは精々、言葉をかけることくらいだった。
「勝ち取れよ」
「そっちこそ」
上条は拳をギュッと握り、削板は気絶した御坂を壁に寄りかけさせ、互いに並ぶように一歩前に進み出た。
目の前には至高の宝が、自分に取ってくれとばかりに輝いている。
もちろん幻聴だ、宝は平等…誰のためにでも存在する。要はそれ程までに魅力的だということだ。
凍えそうな程に冷たい箱の中に眠る、鮮やか赤色…そして霜の様に飛び散る美しき白い模様…あぁ、今すぐにでもてにいれたい。
しかしあれを手にするのはそうそう容易いことではない、ここに集まっている殆どの者達の目的が〝あれ〟なのだ。

ここはスーパー…

そして今日は…お肉安売りデーである。
迫り来る猛者(主婦)達との戦いが今、始まった。

ヒーロー、捕まる

「この度は本当に…本当にありがとうございます。
もう感謝の限りで…上条さんは頭があがりませんよ」
すき焼肉を両手で持ちながら、深々と頭を下げてお礼を述べる上条。
どうやらあの後結局敗北し、削板の戦利品を一つ分けて貰った（もちろん代金は支払ったが）らしい。
「いいって、頭あげろよ」
とは言ったものの、削板も育ち盛りの男子高校生だ。正直1パックだけでは物足りない。
金には苦労しているため、こんな高級な肉は、こういった特売の日くらいでしか食べることはできない。
全く後悔は無いと言えば嘘になる。
しかしその程度の不満など、肉を受け取った上条の幸せそうな顔を見たら、綺麗さっぱりなくなってしまった。
趣味で続けているヒーロー活動…これはただの自己満足でやっていることだ。

別に見返りを求めているわけでもない。
しかし実際に感謝されてみると、存外…悪くないものだと思ったりもする。
そんな事を思いながら、削板はちょっとした悦に浸っていた。
「…何か、騒がしいな」
スーパーから西の方角だろうか…少し離れた場所から、物がゴロゴロと転がる音と、人の叫び声が聞こえてくる。
「誰か暴れてるのかもな、何か最近そういうの多いし」
先日も、能力者で暴れていた不良グループを懲らしめたが、削板の言葉の通り、最近能力を使って事件を起こす者が増えている。
ある意味では、現在気絶している御坂もその一人と言えるかもしれないが…
ともかく、この立て続けに起こる能力者による事件には、何らかの関係性があるのかもしれない。
…と、削板は心の奥底でなんとなくそう思った。
「…まぁ、ほっとくわけにもいかねーし、止めてくるか」
「俺も行く」
「いや、一人で大丈夫だって」
「確かにお前の強さなら大丈夫だとは思うけど、俺だって暴れてる奴がいるって言うん

なら、ほっとけねーよ」
「…まぁ、そこまで言うなら止めないけど」
正直暴漢の鎮圧など、一人でも十分過ぎる程に十分だが、上条の目を見る限り言っても聞き入れそうにない。
とは言え削板は風紀員（ジャッジメント）や警備員（アンチスキル）の様な、治安維持組織に加入している訳でもない為、一般人の介入にも寛容だ。
というか、ヒーローを名乗っていようと、削板も一般人と区別される者の一人。他人に対して一般人だからどうこうと言う資格もない。
もし危ないようならば、自分が助ければいい話だ。
二人はスーパーの前にある横断歩道を渡り、騒ぎの現場へと駆け出した。

「俺は無敵だ！おい！誰かかかって来ないのか⁉？」
馬鹿でかい声が響いてきた。
どうやら削板の推測は当たっていたらしい、騒ぎの中心人物は高位の能力者と思われる。
それもかなり自信家のようだ。口だけではない、凍りついた掃除ロボットや、おそらくこの男と戦ったのだろう…気絶した他の能力者達がそれを物語っている。

「おい！暴れるのは止めろ！しかもこんな街のど真ん中で…迷惑だろ！」
削板の言う通り、男が暴れている場所は、一般人も通行に使う場所だ。
そんな所で暴れられるのは迷惑この上ない。もっと場所を選んで欲しいものである。
しかしそんな事は意に介さない能力者の男は、次の標的を削板へと見定め、尚も暴走を続けた。
「俺に指図してんじゃねーよ！
今度はお前を、この俺の能力でのしてやろうか？」
「いや…指図って言うか…迷惑だから迷惑だって言ってるだけなんだけど」
「それを指図って言うんだよ！
どうしても俺を従わせたいんなら、俺の能力、〝分子鈍化（スローコールド）〟を打ち破って、力づくで従わせるんだな！」
「人の話を聞かない奴だなお前」
自分の能力に過信し過ぎている為、半ば盲目的になっているのか、分子鈍化の男には削板の声が届いていない。
「俺は触れた物の分子の動きを鈍くする事ができる！
分子の動きが小さくなれば、物体の温度も低くなる、これを利用して、物質を凍らす事すら可能だ！」

男は脅しかける様に、自分の足元に能力を使用した。
男の足元を中心に、凍った地面がどんどん広がっていく。
意外にもかなり凶悪な能力であった。
言ってしまえば、触れただけでも人を簡単に殺せる能力だ。大能力者（level4）は固いだろう。
「まぁ安心しろよ、死なないように手加減はしてやるからよぉ」
「厄介な能力だな…だけど俺の右腕なら…」
そう言って上条は、右の拳を強く握り締めた。
彼の右手には幻想殺し（イマジンブレイカー）と呼ばれる、あらゆる異能の力を打ち消す能力が備わっている。
例え超能力者（level5）の電撃だろうが、超電磁砲（レールガン）だろうが、神の奇跡だろうが、それが異能のものでさえあれば、何でも消す事ができる。
それが上条当麻の、生まれながらにして持つ力だ。
「俺があいつの能力を封じてる間にーー」
いかに強力な能力であろうと、それそのものを無効化してしまえば恐ろしくは無い。
上条当麻の右手を使えば、それが可能なのである。
「って、おい！」
しかし削板は、上条の右手の事を知っているにも関わらず、上条の言葉を無視しいつ

もの無気力な顔のまま、前にズンズンと進んでいった。
「いい度胸だな」
男はニヤリと笑みを浮かべて、削板を見下した。
男を中心に、大気が冷たく凍えてゆく。
肌に突き刺さる様な冷気を浴びても未だ、削板には一切の危機感も見られない。
削板は真っ直ぐに相手を見たまま、拳を硬く握り締め…
「ぽっちり凄いパンチ」
の掛け声と共に、それを放った。
「ビブルチッ!?」
削板の拳から放たれた衝撃波をその身に受け、分子鈍化（スローコールド）の男は先程削板と上条がいたスーパーまで、後ろ向きのまま吹っ飛んでいった。
「よし、事件も解決したし、今日は帰るか…」
削板は何事も無かったかの様に、左手で御坂を担ぎ、右手でスーパーで購入した肉の入ったビニール袋を持った。
「あー…やっぱ俺、来なくてもよかったかもな…」
あまりにも呆気なく、一瞬にして事件が解決したのを目の前に、上条は脱力感を表せずにはいられなかった。

しかし考えてみれば当然の事なのかもしれない、今現在削板が担いでるのは常盤台の超電磁砲（レールガン）だ。
この街でももっとも有名な能力者の一人であり、超能力者（level5）の第3位、そんな化け物を一撃で倒したのだ。いくら腕に自信があろうと、そんじょそこらの能力者では傷一つ付けられない。
「そう言えばこいつって、何処に住んでるんだろうな。
このまま連れて帰る訳にもいかねぇし、送り届けておかないと」
「…常盤台の生徒だし、多分常盤台の寮にすんでるんじゃないか？」
こいつ…というのは、もちろん御坂の事である。
その辺に捨てて行く訳には行かないし、かと言って連れて帰ったら…何かと誤解を生んでしまう可能性もある。
あまり他人からのイメージにこだわる気はないが、流石に気絶させた女子中学生を自室に連れ込んだ男…何て噂が立つのはヒーローとして…というか人間として避けたいものである。
（…というか、それ以前に白昼堂々、公衆の面前でこんな、明らかに異常を来たしていると思われる人間を、それも？き身で運んでいてもいいものなのか！）
…と、上条が今更ながらに疑問に思った瞬間…

「ジャッジメントですの！」
ツインテールの常盤台生が、削板達の目の前に、文字通り突然現れた。
「能力を使用しての暴動が起きてると聞きつけ、駆けつけました。
無駄な抵抗は、しない事をおすすめしますわ」
ツインテールの少女が腕章を見せつけながらそう言った。
この腕章には見覚えがある。
この街の治安維持組織の一つ、風紀委員（ジャッジメント）の腕章だ。
「おっ、あの制服って、こいつと同じ常盤台だよな。
じゃあ後はあいつに任せようぜ」
「えっ⁉？いや、今はやめといた方が…」
「え？何で？」
「何でっつーか…」
などと話をしている内に、二人は既に風紀委員の少女に目を付けられていた。
上条が危機を感知したが、それも虚しく手遅れになってしまったのだ。
「あ…あなたが左手に担いでいるのは…もしかして…！」
突然御坂を指差し…目に見えて動揺し始める風紀委員の少女。
なにやら御坂の知り合いだったらしい。

「あぁこいつはさっきーー」
と、削板が言い終わるよりも前に、少女は削板の前に一瞬で移動し、御坂の体に触れて、共に再び元の場所に瞬間移動した。
「テレポーター（空間移動）か？」
少女の一連の動きを見た上条がそう言った。
上条の言う通り、彼女は空間移動系の能力者だ。
名は白井黒子。風紀委員（ジャッジメント）にしてｌｅｖｅｌ４クラスの能力者である。
「や…やっぱりお姉様でしたの!!?
で、でも…一体何故気絶して担がれて…まさか！」
「そいつはさっき俺が…って、話きいてる？」
削板が語りかけるが、彼女の耳には届いていない。より一層大きく動揺するだけである。
「あ…あなたが暴動を起こした犯人、そしてお姉様に危害を加えたにっくき暴徒ですのね!!?」
ビシッと指を指して削板を睨みつける白井、その目にはハッキリとした怒りが表れている。
そう、彼女…白井黒子は風紀委員（ジャッジメント）であり、大能力者（ｌｅｖｅｌ４）であり、そして…御坂美琴の熱心

的…いや狂信的なファンであった。
彼女の御坂に対する想いは、憧れを通り越し、歪んだ愛情に変わっている程である。
「おい！違うぞー！
いや…確かに半分合ってるけど、違うぞ！」
言い訳をするが、やはり彼女の耳には届いていない。
怒りのまま、今にも襲いかかってきそうな顔になっている。
「問答無用！正面からお姉様を倒すことなんてできない！
きっと何か卑怯な手を使ってお姉様を陥れたに違いありません！わたくしはそんな輩に負けませんの!!?」
完全にヒートアップしてしまった白井。もう何を言っても聞き入れてはくれないだろう。
「ちょっ、おまーー」
流れる様に、削板の両腕が手錠で縛られた。
「話は署で聞きますの！おとなしく！お縄につきなさいな!!?」
「あ！ちょっ！ちょっと待て！俺のすき焼きがぁぁぁ!!?」
せっかくご馳走を手に入れたというのに、このままだと何日も食べられないかもしれない。

しかしそんな事は、相手にとっては知った事ではない。削板は風紀委員の支部へと引っ張られていった。

「…不幸つーか、本当についてないな、あんた」

と、他人事のように憐れみの目で削板を見つめる上条であったが…

「何を言ってますの？共犯であるあなたも一緒に逮捕するに決まっていますわ」

不運な彼が逃げられる筈などない。

削板共々、今回の事件の犯人として、風紀委員（ジャッジメント）に連行されるのであった。

「ふ…不幸だぁぁぁぁ!!!」

番外編

《番外編》メリーコワシマス（上）

数ヶ月程前の話…

今日の削板はいつもより少し違っていた。

いつもはハチマキに白い学ランを羽織るというのが彼の正装なのだが、今日は赤い帽子に赤い服…赤いズボンという全身真っ赤の所々白が混じった格好をしている。

何より変なのは、顔につけている真っ白の付け髭だ。

薄々感づいている人もいるだろう…その通り、サンタクロースの格好である。

何故こんな格好をしているか…答えは簡単である。

今日はクリスマスイヴだからだ。

彼の趣味…すなわちヒーロー活動を行っているため、殆ど登校してはいないものの彼も学生なので、一応は学校に在学していた。

そんなある日に、久しぶりに学校に登校した削板が、担任の教師にある頼み事をされたのが始まりである。

その頼みというのが、その担任教師の友人が園長をしている、〝ひまわり〟という施

設で、サンタの格好をして子ども達にプレゼントを配って欲しいとのことだ。
（〝ひまわり〟…というのは、身寄りの無い〝置き去り〟と呼ばれる子ども達の保護施設…いわゆる孤児院のような施設らしい）
その役目を、何故削板に頼んだのか…それは彼の能力に起因する。
この時には既に、削板は不断の努力によって、Ｌｅｖｅｌ５の第七位にまで成り上がっていた。
なんでもその施設の園長が、子ども達に「サンタクロースというのは不思議な力を使える魔法使いのようなおじいさんなんだよ」とか、夢を与えるためにいろいろと話を盛り過ぎてしまったらしく、子ども達の間でのサンタクロースという存在は「人類を超越した完全な存在」…みたいな感じで、崇拝に近いレベルで憧れの的になってしまっているらしい。
そんな完璧超人と化してしまったサンタクロースを演じるのに、もはや普通の人間では力不足なのだ。
そこで目をつけたのは高位能力者だ。
魔法の様な力を使うことのできる能力者…それもＬｅｖｅｌ４以上の者ならば、子ども達が理想とするサンタ像にも限りなく近づけると考えた。
幸いにも、そんな能力者達の中でも最高クラスの能力者…Ｌｅｖｅｌ５が友人の務め

る学校に一人だけいた。
それが削板である。
元々は頼まれたら断れない性格の人間だった上、それなりに御礼もすると言われたので、削板も二つ返事でＯＫした。
この施設の者達は本当に運が良かったと言えるだろう。
Ｌｅｖｅｌ５といえば〝人格破綻者集団〟という話をよく聞く、事実その通りだ。
こんな頼みを聞き入れてくれる者など、七人いる中でも削板を入れて二人しかいないだろう。二百万人近くの能力者の中の頂点七人…そしてその中で二人、奇跡にも近い数字であった。
ともかく、削板は承知したのだ。
そして今日は約束の日である２４日、クリスマスイヴだ。
早速削板は、サンタの格好で街へと繰り出した。

シーズン真っ只中というだけあって、町中がクリスマス一色に染まっている。
店々にはクリスマス定番のリースやベル、サンタの人形やトナカイの人形などが飾られており、大小様々なツリーが建てられている。
建造物だけではない、町を歩く人々もクリスマスモードに変わっており、その景色は

サンタの服装をしている削板がまったく目立たないほどである。
「盛り上がってるなー」
削板がキョロキョロと辺りを見回しながら言った。
よく見てみると、ＬＥＤ電球のようなものがちらほらと見える、現在は昼だからわからないが、おそらく夜になるときらびやかなイルミネーションが現れるのだろう。
そしてここは科学の最先端の街学園都市だ、その科学力を生かした素晴らしい光のアートが期待できる。
「夜になったらツリーだけでも見に来るか…」
削板が謎の機械が取り付けられた、一際でかいツリーを見ながら言った。

しばらく歩いていると、大きなケーキ屋の前に到着した。
「確か…待ち合わせ場所はここだったよな…？」
ケーキ屋の周辺を見回しながら呟く削板。
やはりクリスマスと言えばクリスマスケーキだ。このクリスマス一色に染まる街の中でも、一際派手に飾り付けが施されている。
とりあえず中に入った削板だが、店内の方も外と負けず劣らず派手だった。
まず目に入るのは、入店した直後に笑顔でお出迎えしてくれる、ミニスカートのサン

タクロースだ。別の場所を見ればトナカイの着ぐるみを着た店員も見られる。
しかし流石に、厨房にいる作業中のパテシエだけは、普通にエプロン姿だった。
「ん…？俺に何か用でもあるのか？」
横から自分を見つめる何者かの視線に気づいた削板が、不思議そうな顔で視線の元の人物に尋ねた。
「あ…すみません。
……えーと…君が…削板君でいいのかな？」
若い男だ。見た目は二十代の後半辺りだろうか…どうやらこの男は削板に用事がある様だ。
「そうだけど？」
「よかった。
いやね、ほら…この店は君と同じ様にサンタの格好をしてる人が多いから」
確かにそうだ、この店の店員のほぼ全員がサンタ…もしくはトナカイの格好をしている。
結構大きな店のため、従業員もそれなりの人数が雇われている。入る瞬間を目撃していなければ、店員と混ざって区別がつかないだろう。
「それでも、こちらが送った物と同じ物を着ていたようだから、なんとなくそうなんじゃ

ないかと思ってね。
　因みにその服…私達の手作りでね、ほら、袖の辺りにひまわりがついているだろう?」
「あ…ほんとだ」
　そう言われてみれば、この店の店員が着ている服の柄とは少し違う。それに他では付いていないであろう、ひまわりの花のマークが付けられている。
「突然無理を言ってしまって申し訳ない、私達の頼みを聞いてくれてありがとう」
　ひまわりの男がぺこりと頭を下げた。
「いいよ、あんまり用事も無かったし」
「本当は直接君の家まで迎えに行きたかったんだけど、いろいろな都合でこのケーキは今日しか受け取りに来れなくてね…」
　男が女性店員が運びやすいように箱に包んだ、巨大な二つのケーキを指差して言った。
「気にしてねぇって」
「そう言ってもらえると助かります。
　近くに車を停めているので、よかったらそれで案内をしよう」
「わかった」

しばらくして、車は第十三学区に到着した。
ここは小学校や幼稚園が多い学区だ。したがって小さい子どもが多く見られる。
そんな子ども達を狙って現れる、空間系能力者の露出痴女が出没するとかしないとか……まぁ…あくまで噂なのだが…
しかし例えそんな輩が現れようと、子ども達を守るために警備員（アンチスキル）や他の教師達が日々警戒しているので、見つかれば直ぐに捕まえてくれるはずだ。
（しかし噂の空間系能力者は超能力者（Level5）には及ばなくとも、それに近い実力らしいので、少々不安である）

車はある建物の前に停車している。
この建物が児童養護施設、〝ひまわり〟なのだろう。
飾り気が無いが、見た目は普通の保育園とあまり変わらない。
「本当に申し訳ない…荷物運びまで手伝わせてしまって…」
ひまわりの男は本当に申し訳なさそうな顔で、他の従業員と二人がかりで、慎重にケーキを運びながら言った。
「いいって、気にすんな」

対する削板は一人で軽々と持ち上げている。
ぞんざいに扱っているように見えるが、不思議なことに中のケーキは一切崩れていない。
これも能力の応用の一つなのかもしれない…

二つのケーキを運び終えた削板達は、施設内の大広場に居た。
ここでクリスマスパーティをするのだろうか、飾り気のない他の場所と比べてかなり派手に彩られている。
「さて…後は子ども達を待つだけだ…
改めてよろしくお願いします、私がここの園長…杉原です。」
杉原と名乗る男がお辞儀しながら自己紹介した。
「あぁ、よろしくな」
「そしてこちらの二人が、ボランティアでお手伝いをしてくれている、山田さんと村本さんです」
紹介された二人が前に出て、ぺこりとお辞儀した。
因みに山田さんというのは女性で、村本さんが男性である。どちらも見た目は三十代の後半辺りで…どちらも小学校の教師である。

「よろしく」
削板も軽く挨拶を返した。
「今日も来ていただいてありがとうございます」
「いいのよ、私達だって好きで来ているんですもの」
「その若さで一人で園長というのは大変だろう？
いつでも頼ってくれたらいい」
御礼を言う杉原に、人の良さそうな笑顔で応える村本さんと山田さん。
「いい人達なんだな」
「あぁ…私も本当に感謝しているよ…今までやってこれたのはあの人達のおかげだ」
削板の言葉に、杉原は何処か悲しそうな顔でそう言った。
「あと二人紹介したい人がいるんだ。
もうすぐ子ども達と一緒に帰ってくると思うんだけど…」
そんな事を言っている間に、ワイワイと小さな子どもが騒ぐ声が聞こえてきた。
「帰ってきた！
削板くん、準備してくれ！」
慌てて削板を指定の位置に誘導する杉原。
「はーい皆さん、外から帰ってきたら、ちゃんと手洗いうがいをするのですよー！」

年長だろうか？子ども達にうがいと手洗いを促す子どもの声が聞こえてきた。
しかしそれにしては変な言い方である、年長者だとしても普通は「皆さん」などとは言わないはずだ。
「削板君、準備はいいかい？」
「あぁ、いいぞ」
準備と言われても、特に何もすることが無いので削板はそのまま答えた。
「それじゃあ私は子ども達を迎えに行こう」
そう言って杉原は子ども達の方へと歩いていった。
「みんな！今から大事な話をするから、静かにして聞くように！」
壁の向こうだから見えないが、その声は削板のいる所までしっかりと聞こえてきた。
「今日はなんと！皆の為にサンタさんがここに、遊びに来てくれました‼？」
杉原は盛り上げるために、大きな声で子ども達に発表した。
その効果は覿面であり、直ぐ様子ども達の大歓声が聞こえてきた。そしてこのことは同時に、それだけ子ども達がサンタに会いたかったということにもなる。削板には更に責任がのしかかった（もっとも…当の本人はどこ吹く風といった感じで、全く責任感など感じでいない顔なのだが…）
興奮鳴り止まぬまま、子ども達は杉原に連れられて、パーティ会場とも呼べる部屋の

中に入ってきた。
そこには自分達の憧れるサンタクロースが立っている。
当然期待に胸を膨らませていた子ども達だったが、いざサンタクロースを目の前にした時の子ども達の反応は…なんとも微妙なものだった。
イメージと違う…
サンタクロースというのは、赤い服に白い髭のおじいさんだ。それに比べて削板は17歳の高校生である、そんな若者が白い髭をつけていれば、小さな子供だろうと違和感は覚える。
「本当にサンタさんなの？」
「当たり前だろ。他に何に見えるんだ？」
半信半疑の子ども達の言葉に削板は応えるが…
正直何にも見えない…サンタにも。
「サンタさんって空も飛べるんでしょ？」
「あぁもちろんだ」
「だったら飛んで見せて」
「いいぞ」
そう言って削板は、子ども達の要望に応えるために外に飛び出た。

興奮して窓に押し寄せる子ども達の中、杉原やボランティアの教師達も、心配そうな顔で削板を見守っている。

「いくぞ、よく見とけよ」

皆が見ている中、削板はそう言って足を曲げ、思い切り地面を蹴った。

ゴオォ‼?と何かが爆発したかのような轟音が響いたかと思えば、さっきまでいたはずの削板の姿が消え去り、代わりに地面には小さなクレーターができていた。

削板の姿を探して、子ども達が右へ左へとキョロキョロと首を動かした。

最初にその姿を見つけたのは、7歳くらいの少年である。「あそこだ！」と空に向かって指を指し、それに従って他の子ども達の目も空へと向いた。

曇りがかった空の中に、削板の姿が見える。

豆粒程の大きさになったかと思えば、暫く静止した後だんだんと元の姿に戻って行き、やがて完全に元の大きさを取り戻した削板が、小さなクレーターの上に着地した。

かなりの高さ…少なくとも何百メートルはあった場所から落下したにも関わらず、地面に着地した時の衝撃は想像以上に穏やかなものだった。

削板が再び部屋の中に帰ってきた直後、子ども達から今までに無い程の大歓声が巻き起こった。

「すごーい!!!本当にサンタさんだぁ!!!」

「だからそう言ってるだろ」
大興奮で子ども達が削板の元に集まってゆく。
見た目にこそは違和感を抱かれていたが、削板は子ども達にサンタクロースと認められたようだ。
「おい、あんまり引っ付くな、歩きにくいだろ」
流石の削板も、１０人もの子ども達に一斉に攻め寄られるのはきついらしい。
「こらこら、あまりサンタさんを困らせちゃだめよ」
「えぇー！もっとサンタさんがどんなことできるか見たいー‼？」
山田さんが削板に気を使って子ども達に注意をするが、サンタに興味津々なのでブーたれる子ども達。
「言うこと聞かない悪い子には、サンタさんはプレゼントをくれないぞ？」
ここで村本さんが魔法の言葉「悪い子はプレゼント貰えない」を唱え、子ども達は渋々大人しくなった。
「クリスマス会は始まったばかりなんだ、サンタさんと遊ぶ時間は後でたっぷりある。それより先にご飯を食べよう！皆！準備を手伝ってくれ！」
「はーい！」
杉原の言葉に、子ども達は元気良く返事をした。

子ども達や大人達、そして削板がそれぞれ協力し、全員座れるようにテーブルを並べ、その上にピザやチキン、サラダやケーキを運んだ。
「先生、今日は凄いご馳走だね！」
「今日は特別な日だからね、遠慮せず食べるんだよ」
目の前のご馳走を見て喜ぶ子ども達に、杉原が優しい笑顔で笑いかけた。
「そぎ…サンタさんも遠慮せずに食べてください。
今日はクリスマスであり……子ども達がここで過ごす、最後の日ですからね」
「いいのか？貰えるって言うんなら貰うけど」
「ええ、もちろん」
削板は万年金欠だ。こんなご馳走をただで振舞って貰えるのは、正直とてもありがたい。
別に断る理由も無いので、遠慮無くいただくことにした。
「そういえばサンタさん、さっき言っていた、紹介したい人が二人いるんですが、構いませんかね？」
「あぁ…そういや言ってたな」
確か後二人ボランティアがいたとかだったはず…と、削板はさっきの話を思い出して

いた。
「あなたが削板ちゃんですねー」
話をする削板後ろから、小さな女の子の声が聞こえてきた。
この声はさっき、他の子ども達に手洗いうがいをするように言っていた、あの時の子どもの声だ。
振り返ってみると、そこには案の定小さな子どもが立っていた。
それも服と髪の毛が両方ピンクのド派手な配色だ。
「ちゃん…？何でこんな小さな子どもにちゃん付け呼びされなきゃならないんだよ」
「私はれっきとした大人なのですよーッ‼？」
「大人？いやいや、ありえねーだろ」
自分の事を大人だと言い張る桃色の髪の幼女。
対する削板はまったく信じていないと言った顔だ。無理もない、見た目は完全に子ども…それも下手をすれば、他の子ども達よりも低い身長だ。
「彼女の言うことは本当だよ。こう見えても彼女は高校の教師なんだ。
その上私よりも年上でしてね」
「マジで‼？」
「マジで」

これには流石に驚きを隠せない削板。
「紹介します。
彼女の名前は月詠小萌さん、山田さんや村本さんと同じ、ボランティアで度々ここを訪れてお手伝いをしてくれています」
「へぇーそうか、ちっちゃいのにえらいな」
「削板ちゃん、まだ私のこと子ども扱いしてません？」
そんな二人のやり取りを見て、苦笑しながら杉原が話を続けた。
「それともう一人。
こちらにいる眼鏡をかけた女性が、鉄装さんです。
彼女は月詠さんの飲み仲間らしく、たまにここへ訪れてくれます」
「飲み仲間…って、やっぱ酒飲めるのか？」
もちろん小萌のことである。
「喫煙だって、運転だってできる歳ですよ？」
そのちんちくりんな体で、どうやって運転するのかは気になったが、聞かないことにした。
「今日は本当に、来ていただきありがとうございます。
特に鉄装さんなんて、警備員（アンチスキル）のお仕事て大変でしょうに」

「そこは何とか、休暇を取ることができました。
…黄泉川さんは都合が合わなかったようですけど」
「それは残念ですね。今まで碌に御礼なんてできていませんでしたし…最後の日くらいは…と思っていたんですが…」
削板はさっきから気になっていたことを尋ねた。
「さっきも言ってたけど、最後ってどういうことなんだ？」
「あぁそういえば、サンタさんには言ってませんでしたね。
実はこの施設、今日を最後に閉めるんですよ」
「閉める…？じゃああいつらはどうなるんだ？」
削板が子ども達を指さして言った。
「子ども達は別の施設に預けられることが決まりました。
せっかく皆、ここで仲良くなったのに、離れ離れになるのは悲しいことですけどね…」
杉原は暗い顔で言った。
「昨日までは大変でしたよ。子ども達に話した途端、全員泣きだしてしまってね。
その悲しそうな顔を見ると、私まで泣いてしまいそうになりました。
同時に少しだけ嬉しくもありました、それだけ子ども達にとって、ここは大切な場所だったってことです」

杉原はとても寂しそうな表情をしている。
それが子ども達と離れることによるものなのか…子ども達の悲しむ顔を見たことからなのか…心優しい人達によって支えられてきた、この施設を閉めることになったからか…
いや、おそらく全てだろう。
「あなたのおかげだ、サンタさん。
あなたのおかげで、子ども達はあんなに笑顔を取り戻した。
あなたのおかげで、最後の日を笑顔で迎えることができた」
杉原は溢れる感情をぐっと堪え、削板に笑いかけた。
「本当にありがとう、サンタさん。
いや…御礼を言う時にはちゃんと名前で呼ばなきゃな…
ありがとう、削板君」
杉原は溢れんばかりの笑顔で、子ども達には聞こえない様に感謝を述べた。
「おっと…少し湿っぽくなったな…パーティに暗い雰囲気は似合わない。
今日は存分にパーティを楽しんでいってください！なんたって今日は、クリスマスなんですから！」

こうして、クリスマスパーティが始まった。

美味しい料理を食べた。

骨までついている柔らかいフライドチキン…トロトロのチーズを乗せたあったかいピザ…甘い、優しい舌触りのケーキ…寿司まであった。

いつもと何ら変わりのないサラダやパンですら、この時はとても美味しく感じられた。

いっぱい遊んだ。

サンタさんと一緒に鬼ごっこをした…隠れんぼをした…ボール遊びをした…サンタさんは慣れていないようだったけど、おままごともした。

サンタさんに色々な特技を見せてもらった。

目に見えない程速く走ったり…ボールを信じられないほど遠くに投げ飛ばしたり…全身燃えているのに無傷だったり…車でお手玉してくれたり…戦隊モノのヒーローのポーズをとったら背後が爆発したり…西側にまっすぐ走って行ったと思ったら東側から戻ってきたり…

挙げ句の果てにはパンチで雲を吹き飛ばして、曇っていた空を無理矢理晴れ空にしていた。

楽しい時間は、流れるように過ぎていった。

「さぁ皆、お待ちかねの時間がやってきたぞ。
サンタさんからのプレゼントだ」
「やったぁー!!」
サンタクロースと言えばプレゼント、ようやくサンタとしての使命を果たす時がきた。
因みに、削板の持つ袋に入っているプレゼントは、削板が選んだ物ではなく、あらかじめ杉原が用意した物を削板が配る…といったものである。
「そんじゃあ、今から渡していくぞー」
削板が順番にプレゼントを子ども達に手渡した。
「やったぁー!!?車のおもちゃだぁ!!?」
「僕は飛行機!!?」
「僕は電車だ!線路も付いてる!!?」
「うわぁー!可愛いお人形さんだぁー!!?」
「私もー!」

「私のはお洋服だぁ!!?」
それぞれ自分の欲しかった物を貰い、喜びはしゃぐ子ども達。
「あれ?他にも手袋が入ってる」
「私のにも入ってる!お揃いだー!」
それは杉原がどうしても入れた、全員お揃いの手袋だった。
これからここを離れる皆に、ここの事を忘れないで欲しいと、そんな想いを込めた物なのだろう。

興奮鳴り止まぬ楽しい一時…そんな時間も、もう終わりが近づいてきた。
「皆、サンタさんはそろそろ帰らなくちゃならないらしい、お別れの挨拶をしよう」
「やだ!!?まだサンタさんと一緒にいたい!!?」
サンタさんとのお別れ。
もちろん子ども達はごねた。
「わがままを言わない!サンタさんだって忙しいんだ!
まだ皆以外の子ども達にも、プレゼントを配らなくちゃならない」
杉原は厳しく言い放った。
子ども達はそれでも納得していないような顔だったが、それでも仕方なく耐えた。

「そういえば皆、サンタさんに渡す物があったんじゃないのか？
サンタさんが帰る前に渡しておかないと」
杉原の言葉である事を思い出した子ども達は、それぞれがどこからか何かを取り出し、削板の前に集まった。
「サンタさん！今日はありがとう！
これ、私達からのプレゼント」
代表として他の子ども達からも集めたプレゼントを、一人の少女が削板に手渡した。
「これは…？」
それは…全て子ども達の手作りだった。
折り紙で折ったリースやサンタクロース…遊んでいた時に描いた削板の似顔絵…少し形の崩れたクッキー…糸のほずれた手編みのマフラー…
どれも若干形がいびつではあったが、一生懸命作ったことがわかる。
「もらって上げてください」
杉原が削板にそっと頼んだ。
「そうか…じゃああありがたく貰っとくよ。ありがとな」
削板は子ども達からプレゼントを受け取り、にっこりと笑いかけた。
「じゃあ、元気でな」

そして削板はそのまま背後を向いて、軽く手を振って、その場から去っていった。
一蹴りでとんでもなく遠い距離に跳んでいく削板の姿を、子ども達は見えなくなっても尚、手を振って見送り続けた。

「今日は最後まで付き合っていただき、本当にありがとうございました」
杉原がボランティアの教師達に向かって、深々と頭を下げた。
「本当に今日が最後なのか…寂しくなるな」
「あの子達も離ればなれになっちゃうのよね…」
山田さんと村本さんが残念そうな顔でそう言った。
この二人は最初の方から、今までずっとここに通ってきたのだ。その分、思い入れも強いのだろう。
「子ども達はそれぞれ別の施設に預けられるらしいですが…あなたはこらからどうするんですか?」
鉄装が尋ねた。
「私ですか、そうですね…
一応、栄養士なんかの資格も取ってますし、それ関連の仕事を受けさせて貰おうかな…と考えているところです」

「どんな仕事をするにしても、挫けず、諦めずに頑張ってくださいね！」
「ありがとうございます」
ぐっと拳を握る小萌の励ましに、杉原は笑顔で応えた。

ボランティアの先生達とも別れ、いよいよクリスマスパーティは完全に終了した。

一時間後…あれだけ騒ぎ声が聞こえていた〝ひまわり〟だったが、今は一切の声も聞こえてこない程静かだった。
子ども達は全員、遊び疲れたのか眠っており、現在この施設には杉原以外で目を覚ましている者はいないからだ。
「パーティも終わり…あの子達ともお別れか…」
誰も居ない静かな部屋の中、杉原は小さく息をつき、子ども達の顔を思い浮かべながら…その場で泣き崩れた。
「私は…無能だ…！情けない…！
あの子達を…あんなにいい子達を…一人も救うことができないなんて…！」

《番外編》メリーコワシマス（下）

自分の家に帰ってきたところで、削板はようやくあることに気がついた。
「服…返すの忘れてた…」
その場の雰囲気でそのまま去ってしまったが、よくよく思い出せば、このサンタ服は借り物だったのだ。
「あぁー…やべぇな…今から返しにいくか？
でも今は後片付けとか大変だろうしなぁ…」
因みに報酬の方は前もって送られているので問題はない。
「明日から無くなるんだよなー…
迷惑かもしれないけど、夜中に返しに行くか」
杉原の話では、今日いっぱいで児童養護施設ひまわりは閉鎖されるとのことだ。
できれば今日中には返しておきたい。

そして時間は夜の十時。
「流石に遅過ぎたか？あのくらいの子どもなら寝てるかもしれないな…」

とはいえ返さないわけにはいかないので、そのまま行くことにした。

返しに行く途中、削板はある場所に寄り道した。

昼間から一度行ってみたいと思っていた場所だ。

「おぉ、流石だな」

削板は街を眺めていた。

正確に言うならば、至る場所に取り付けられたイルミネーションを眺めていた。

「昼間ここに来た時からちょっと気になってたんだよな」

そう思ってここに来たのは削板だけではないらしい、もう既に完全下校時間を過ぎているというのに、いたるところに学生の姿が見える。

警備員（アンチスキル）も今日だけは大目に見ているのだろう。

しかし、度が過ぎる行動をとる者がいないか、警戒している姿も見られる。

（まぁ、俺は年中夜でも歩き回ってるけどな）

…と、そんなことを考えていると、突然背後から激しい光が放たれた。

「ん？なんだ？」

光の出所は、昼間も見た巨大なクリスマスツリーだ。

ツリーから巨大な立体映像が街中に映し出されている。

光で作られたサンタクロースが、トナカイの引くソリに乗って街中を駆け回り、偽物の雪が降り積もる。
積もった雪からは巨大な雪だるまが生まれ、やがてそれが全て溶けて水になり、再び凍りついて今度は氷の城が作り出された。
氷の城からは美しい姫が現れ、逞しい王子と共に歌を歌い、ダンスを踊る。
街は一瞬にして、煌びやかで幻想的な世界に包まれた。
立体的に見えるがもちろん全ては映像…偽物だ。
手で触れても全てすり抜ける、温度も感じることはできない。
しかし本当に景色だけは、まるでその世界に入り込んだかのように鮮明でリアルだった。
「見に来て正解だったな」
削板はその美しい景色を眺めながら、楽しそうに一人そう呟いた。

ついつい光のアートに見入ってしまい、時間が経つのを忘れていた削板。
現在は夜半０時頃…既に子ども達は眠っているだろう。
園長である杉原まで眠っていないことを祈るが、時間が時間だ、眠っていてもおかしくない。

削板は静かに〝ひまわり〟の入り口に向かったが、様子がおかしいことに気づき、その足を止めた。
〝ひまわり〟の前に、怪しいトラックが停車している。
それにまるで、人目を避けるかのような、明かり一つ無い真っ暗闇だ。
「何してるんだ?あいつら」
殆ど何も見えない暗闇だが、削板の目には全てはっきりと見えていた。
「〜〜〜‼?」
「〜〜〜‼?」
二人の男が言い争っているのが見える、一人は杉原…もう一人は…顔を隠していてよくわからない。
「ぐあっ…‼?」
杉原が謎の男に突き飛ばされた。
謎の男は部下に命じて何かを運ばせている…
削板はそれをじっと見つめた。
あれは…
静かに眠っている〝ひまわり〟の子ども達だ。
「そこで何をしている!」

削板の背後から声が聞こえていた。
あの男達の仲間だろうか、近くで覗き見をしていた削板を警戒している。
「答えろ!!?-そこで何をしていた!!?-場合によっては貴様をーー」
「お前ちょっとだまれ」
騒がしいので、削板は即座に気絶させた。
幸い向こうにいる謎の男達には何も聞こえなかった様だ。
男達は〝ひまわり〟の子ども達を全員運び終えた後、トラックに乗って子ども達と共に走り去って行った。

「なんだったんだ?」
何が起こったのかはよくわからなかったが、子ども達が攫われたのだ。ほっとくわけにはいかない。
とりあえず削板は事情も全部知ってそうな人物…杉原の方へ駆け寄った。
「おい大丈夫か?ここで何があったんだ?」
「!!?…君は、削板君!!?」
……何も無いさ、気にする様なことは何もね…」
何故か削板から目を逸らす杉原。

その反応から、何かを隠そうとしているのは明らかだ。
「何も無いわけねぇだろ、さっきのやつらは何だ？」
「今日ここを閉めると言っただろう？
子ども達は別の施設へ移されただけだ」
あくまでも誤魔化そうとする杉原に、削板は胸ぐらを掴んで詰め寄った。
「そんなんじゃ無いってことくらい俺でも分かる。
本当のこと言えよ」
「・・・・・」
杉原は黙り込んだ。
本当のことを言うか言わないか迷っているようだ。
「…本当のことを言っても、君には何もできやしないさ。
ならばいっそ、最初から知らない方がいい」
「そんなの勝手に決めんな」
「……分かった、だったら話そう。
聞いても後悔しないでくれよ？」
杉原は軽く息を吐いて、削板の要求に承知した。
「・・・・・」

削板は胸ぐらを掴んでいた手をパッと離し、その場で黙って聞き耳を立てた。
「…あの子たちは元々、とある実験の為にこの施設に預けられた被験体だ」
「⁉?」
被験体…削板にも馴染みある言葉だ。
その印象は決していいとは言えない、むしろ最悪である。
「置き去りの子ども達（チャイルドエラー）には親がいないからね、何をしても文句を言われない。
何よりいざとなれば、存在自体を簡単に抹消できるからね」
一応学園都市には置き去りを保護する制度が存在するのだが、それを逆手に取り非人道的な実験を行う連中が後を絶たない。
あの子ども達も、そんな非道な大人の勝手に巻き込まれた、被害者達の一部なのだろう。
「あんたは最初から全部知ってたのか?」
「途中から知った、〝ひまわり〟自体は、最初からこの実験の為だけに作られた施設みたいだけどね…
…ははは…笑えるだろう?良心を絵に描いたような私の仕事の実態は、人間を食用の家畜みたいに扱う、クズ以下の汚れ作業だったのさ」
杉原は生気の感じられない目で、まったく心から笑えていない、乾いた笑みを顔に浮

かべていた。
「何であんたにあいつらが預けられたんだ？」
削板は表情に影のかかった顔で、杉原に冷たく問いた。
「健康な被験体が欲しかったんだろうね、そういう分野においては、私はプロだ」
彼自身、こんなことをする為に今まで勉強してきたわけではないのだろう。
その事を、彼の悔しそうな表情が語っている。
「…このままだと、あいつらはどうなるんだ？」
「私は科学者ではないから…実験の内容はよくわからない…
だけど、無事ではすまないことは確かだろうね…わざわざ置き去り（チャイルドエラー）の子ども達を使ってまでやろうというのだから」
杉原の答えに、削板は「そうか」とだけ返した。
「何をしてるんだ？」
突然サンタの服装に着替え始めた削板を見て、杉原は不安気な顔で尋ねた。
「サンタってのは主に、クリスマスイヴとクリスマスの間…子どもの寝てる時間に動くもんだろ？」
「!!…一体何を…！するつもりなんだ…!?？」
杉原は声を荒々しくして削板を睨みつけた。

怒りを向けているわけではない、削板を心配してのことだ。
対する削板はまるで買い物にでも行ってくるかの様な、軽い口調でこう言った。
「ちょっと行ってくる」
「まて‼?」
杉原が削板に食ってかかった。
「行くって言うのは…あの子達を助けに行くという意味か⁉?」
「あぁ、今の話を聞いてほっとくわけにはいかないからな」
険しい顔をする杉原とは打って変わって、平然とした顔で話を続ける削板。
「駄目だ‼?行けば君自身まで危険に晒すことになるんだぞ‼?」
力の限り削板に掴みかかる杉原、必死に削板を睨む彼の目は、打ちのめされ、縋りついて懇願しているかのようにも見えた。
「君がどんなに強くても!相手はそれ以上に強くて大きい‼?
例え勝てたとしても!君はこれからもっと大きなものを敵に回すことになるんだぞッ!!」
杉原の言葉を聞いて削板は思った。
子ども達を連れ去った組織は、この街の闇に触れる程根深い組織なのだろうと…
かつて地獄をたらい回しにされてきた削板は、この街の闇についても知っていた。

それを敵に回すという事が、どんな事なのかも…全て知っている。
だが、そんな事は削板には関係無い。
「じゃあお前は…本当にこのままでいいと思ってるのか？」
削板が冷たい声で言った。
「言い訳がないだろう‼？私だって…！助けられるものならばあの子達を助けたい!!!
だけど私には…！それをできるだけの力は無いんだよ…！
世の中には…！どう足掻いても不可能な事柄だってあるんだ!!!」
助けたいのは本心だ。
心の底から求めている願いだ。
もしこれが叶うのなら、自分の命を投げ売ってもいい覚悟だってある。
だが…それでも届かないのだ。
何をしても叶うことない、虚しい願いなのだ。
「…その不可能な事柄ってのを、可能にするのがヒーローだ」
そう短く応え、削板は自分の口に白い付け髭を付けて、赤い帽子を深く被った。
「あいつらにとってサンタはヒーローみたいなもんなんだろ？
だったら俺が行くしかないだろ、俺はあいつらにとっての、サンタクロースってことになってんだから」

「不可能だ…君まで死にに行くことはない」
「根性と正義の味方に、不可能なんてねぇ」
そう…彼には…削板軍覇には敵が誰だろうと関係無かった。
例え相手がどれだけ強くても…例え相手がどれだけ強大でも…関係ない。
今まさに、目の前で闇に飲み込まれそうな者がいるのなら、根性を持って救い出さなくてはならない。
何故なら彼は…ヒーローだから。
「正義は絶対勝つからな」
削板は太陽の様な笑みで、根性を携え前に進み出た。

正義執行

ここはとある研究所。

表向きは遺伝子研究による品種改良を名目としているが、裏では動物実験…または非人道的な人体実験が行われている。

「例の被験体は届いたのか？」

「はい、博士」

「そうか…

ククク…これで新人類計画もまた一歩前進するだろう…」

この研究施設のトップと思われる眼鏡をかけた男が、上機嫌で笑っている。

その背後には、グロテスクな肉の塊が水槽の中に浮かんでいる。あの子ども達もこれらの仲間になるかもしれない…考えたくもないことである。

「実験は明朝行うとしよう…

皆、各自休んでいてくれ」

眼鏡の男が研究員達に休憩を言い渡した。

正直今すぐにでも、手に入ったばかりのクリスマスプレゼントで研究を進めたかったが、研究員達の疲れも溜まっている、ここで下手に働かせて、せっかくの玩具を無駄に壊されでもしたらたまらない。

名残惜しいが、ここで少しの時間を置くことにしよう。

たった数時間だ、睡眠でもとればすぐに経過する。

そう思い目を瞑ろうとした矢先、耳に巨大な爆発音が響き渡った。
「!!?…何だ!??」
眼鏡の男は目を見開いた。
そして驚愕した、装甲車でも破壊できない強固な壁に、見るも無残な大穴が空いていたのだ。
破壊された破片が粉に変わり、粉塵となって空中を煙の様に覆っている、それにより姿は見えないが…しかし、敵は確かにそこにいた。
ジャリ…ジャリ…と、石ころの様に粉々になった壁を踏みつける足音が聞こえてくる。
粉塵の煙の中から人影が見えた。
人影はゆらりゆらりと形を変え、粉塵の吹き払い、その姿を現した。
赤い服に赤い帽子…そして白い付け髭…
「サンタクロース!!?
…ふざけているのか!!?誰だお前は!!?」
「俺か…?
俺は趣味でサンタをやってる者だ」
壁の大穴を背に、削板は堂々と答えた。

「趣味だと…⁉？
　ふざけるな‼？一体何が目的だ‼？」
　自身の研究所を破壊され、憤怒の感情を表に出す眼鏡の男。
　直ぐにでも削板に襲いかかりそうなほど、その目は怒りに燃えている。
「お前らが盗っていったものを返して貰いに来た。
　サンタは子どもの味方だからな」
「返して貰う…？子どもだと…？
　あぁ、あの実験体達のことか」
「よく分かってんじゃん、だったらさっさと返せよ」
「返せと言われて、大人しく返すわけがないだろう。
　あれらは私にとっても大事なモルモットなんだからな」
「そっか、じゃあ力づくで返して貰う」
　削板は拳を硬く握って、足を一歩前に進めた。
「ふん…いつ見ても滑稽なものだな、偽善者の馬鹿というのは…
　やれ危険思想だとか、やれ非人道的だとか…科学のかの字も知らんくせに私のやり方に口を出すとは、実に愚かだ」
　口元に笑みを浮かべる眼鏡の男、しかしその目には依然と変わらず怒気が含まれてい

る。

「今まで自分達がどれほどの恩恵を受けてきたか…それも知らずに、知ったかぶりで正論を述べたつもりでいる…！実に吐き気がする！

いいか！これまでの科学の発達は！お前達の言う、危険を冒してまでつき進んだ結果によるものだ‼？それも分からん凡人が、新たな人類の進化を…人間をより完璧な存在に近づける私の研究に‼？口を挟んでくるんじゃない‼？」

「新たな人類の進化…？」

「そうだ‼？人類はまだまだひ弱で頭も悪い‼？だからこそこれ以上の進化が必要なのだ‼？

人類には完璧になれる可能性がある！私の研究が成功すれば、限りなくそれに近づける‼？

現人類よりも遥かに優れた存在、それらが世に溢れれば、きっと世の中は素晴らしいものに生まれ変わる‼？

逆に成長をやめた人間こそ！消えるにふさわしいものなのだ‼？」

人類の人工的な進化…それが彼の最終目的であるらしい。

口先だけでは無い、彼にはそれを実現させるだけの頭脳が備わっている。

しかしその為ならば、人の命も軽いと考える彼の思想…

それを、正義感の強い削板は何を思って聞いていたのか…どんな顔をして聞いているのか。

「あっそー…」

答えはそう、興味すら持ってないと言うのが正しいだろう…緊張感など欠片も無い気の抜けた顔で、興味のなさそうに聞き流していた。

「まぁあれだ…人類の進化だとか、難しい話はあんまりわかんねぇけどさ…そんなもんやりたいなら勝手にやってればいいし、別に俺は邪魔なんかしねぇ」

削板は意外にも、眼鏡の男の思想に非難も軽蔑も示さなかった。

「だけど…あいつらまでその研究に巻き込もうってのなら、俺は許さねぇ」

削板は眼鏡の男をまっすぐ睨みつけた。

「お前の勝手な研究のために、他人まで巻き込んでんじゃねぇよ！

やりたければお前一人でやれ！」

「一人でやれ…か、私も最初はそのつもりだった。

だから私は自分のクローンを造りだした。この研究所の職員だって８割が私のクローンだ。

だがクローンと本物の人間とでは、説明のつかない差があるのだ。かつて行われた、第三位のクローンによる超能力者（Level5）量産実験が失敗したようにな。

だからこそ、本物の人間を使った実験が必要なのだ」
「そんなもん知るか」
「別に知ってもらわなくても結構だ…お前はここで死ぬ、障害物は潰して進むのが一番だろう?」
眼鏡の男が右手で合図を送った。
それを引き金に、削板の周りを、眼鏡の男と同じ顔をした集団が取り囲んだ。
「全て私のクローンだ。
能力を植え付けた者…人体を機械に変えたサイボーグの者…遺伝子操作によって、人間の能力を超えた者だっている。
その上学園都市製の武器で武装している!一人一人が大能力者(Ｌｅｖｅｌ４)クラスの戦闘能力を誇る!
お前にこれが!突破できるかっ!!?」
眼鏡の男のクローン達が一斉に削板に襲いかかった。
強力な重火器、Ｌｅｖｅｌでいえば3に相当する能力による攻撃が飛んでくる。
雨の様に降り注ぐ弾丸、炎、電撃。
嵐のような猛攻を前に、削板はただ、天高く右手を突き上げているだけだった。
しかしその瞬間…右手を突き上げる削板の中心から、カラフルな煙を伴う広範囲の爆

発が巻き起こった。
「かっ!!?」
眼鏡の男は戦慄した。
武器は粉々に破壊され、クローン達の攻撃は全て掻き消された。
たった一度の攻撃で、二十人はいたはずのクローン軍団が全滅していた。
「あっ…ありえんッ!!?そんなバカなことがッ…!」
混乱する眼鏡の男。
額からは滝の様に汗が吹き出し、目を見開いたまま、無茶苦茶に髪をかき乱していた。
「サンタってのはな…良い子の味方で、悪い子に厳しいんだ」
「ひっ!」
削板と目を合わせてしまった眼鏡の男は、あまりの恐怖に足を滑らせ尻餅をついた。
「だからお前のこの研究所、俺が全部ぶっ壊してやる。
今夜は〝メリー・クリスマス〟改め…〝メリー・コワシマス〟だ!」

朝になって日が登り。
児童養護施設〝ひまわり〟にも日の光がさし始めた。

しかし明るくなる施設内とは相反し、杉原の心はまるで、谷底にいるかのように暗く沈んでいた。
子ども達を見殺しにして…それを助けに行った心優しい少年も見殺しにしたのだ。
杉原の頭の中は何もできない自分自身への、軽蔑や失望の念でいっぱいになっていた。
「私は何て…情けないんだ」
いくら自分を責めても責めたりない…杉原の心はどんどん暗がりへと沈んで行った。
「!!?」
杉原は驚いて飛び跳ねた。
近くからズゥンという、何か大きな物が落ちてきたかのような、鈍い衝撃音が響いてきたからだ。
杉原は急いで原因を確かめに外へ出た。
そこにあったのは、杉原をもっと驚かせる光景だった。
「よぉ、全部取り返してきたぞ」
子ども達を連れ去って行った、あのトラックが再び目の前に停車していた。
そしてその隣では、削板がこちらに笑いかけている。
「流石に全員抱えて来るのは大変だから、このトラックの中に全員入れて連れてきた。

まぁ運転できないから持ち上げて持ってきたんだけどな」
「君は…一体…」
杉原は上手く言葉にできなかった。
驚きと嬉しさで、頭の中がごちゃごちゃになっているからだ。
「もう失わないようにしろよ、お前にとって大事なやつらなんだろ？」
そう言って、後ろを向いて立ち去ろうとする削板。
「ま…待ってくれ‼？」
立ち去ろうとする削板の背後から、杉原が大きな声で呼び止めた。
「御礼をさせてくれ！何をしても足りないかもしれないが…それでは私の気が収まらない！」
「礼なんかいらねぇよ…
もう〝既に〟貰ってるからな」
削板は振り返らずに笑った。
その手に子ども達から貰った、手作りのクリスマスプレゼントを持ちながら。